

後書き

月村辰雄

きわめて個人的な思い出ばかりを書きつらねさせていただく。

手もとに深緑色をした河出書房の世界文学全集の一冊があって、渡辺一夫訳のラブレーにあてられており、今あらためて奥付をみると、初版は1965年に刊行されたものである。その頃、僕は中学に入ったばかりであったが、たまたま子供向けの昔話集でガルガンチュアのことを読んでいたし、また、本屋の書棚に白水社の完訳版がならんでいるのも目にしてた。それはまことに素っ気ない装丁であった。しかし、妙に子供心をそらされたものか、何度かこわごわ手にしたことを覚えているけれども、小遣いで買える値段ではなかった。僕が初めてラブレーに接したのは、そんなわけで、この河出の小さな抄訳版をとおしてということになる。

もちろん、まだ酒の味を知らず、消化不良で痩せこけた中学生の話であるから、中華料理の品書きにフランス料理のメニューをフリガナにつけたような、その豪華な訳文には圧倒されるばかりであった。なめるように文字を追ったとはいえ、かんじんの「滋味豊かな骨髓」はきっと素通りしてしまったのであろう、その時の読書の感想については不思議なほど何も思い出せない。ただ、渡辺先生はこの本の末尾に訳者後記をつけ、一冊本にまとめるにあたって章の選択やその他の体裁をすべて二宮敬という人にゆだねた、と書き添えている。一ページにみため簡素な文章であったが、高名な仏文学者が年若いお弟子さんに寄せるただならぬ信頼の情は、稚拙な読者の胸にも響き、僕は憧れをもって二宮先生のお名前を脳裏に刻みつけた。

指を折って数えてみると、先生はその頃ちょうど三十代のなかば、本郷に着任されたばかりの時期にあたる。実は僕が仏文科で勉強しようと心に決めたのも中学の頃なのだが、その訳者後記の文章がきっかけであったと言ってしまうえば、いかにも因縁話めしてしまうのかもしれない。しかし、20年以上も昔の話なのだ。原因と結果を取り違えたところで、いかほどのことがあろう。

大学紛争の時期、バリケードにかこまれた大学の構内にまぎれこんだことがある。僕は丸の内線の茗荷谷に通う高校生であった。冬のある朝、事故で地下鉄がとまり、しかたなく国電のお茶ノ水駅からあてずっぽうに歩きだしたのであったが、いつのまにか竜岡門をくぐりぬけ、気がつくくと安田講堂がそばいていた。おそらく海軍士官めい

た僕の制服がいけなかったのであろう、机や椅子を無造作に積み上げたそのてっぺんから、一人の学生がけわしい目つきをしてこちらを睨んでいる。今にも誰何されそうであったので、僕はあわてて方向をかえた。高校生にとって、大学の構内は迷路に近い。人気のなさそうな薄暗い通路で一息つくと、目の前に破れかかった全紙大の時間割りが貼りだしてあり、文学部という文字が読めた。僕は二宮敬という人が東大の先生であることを、この時、その貼り紙から知った。

後年、お酒の入った席で、どのようなつながり具合であったか、話がたまたまそちらに向かい、もっとも勉強に打ち込まれたのはいつの頃ですかと先生にお尋ねした。不躰であった。先生は苦笑なすって、三十代の前半はととてもよく勉強ができましたと答えられたのだが、僕が三十を越して浮き足立ち、その上、ある私事に気持ちがわだかまって、何ひとつまとまった仕事が手につかぬのを、先刻お見通しの眼差しであった。いたたまれなかった。ふだんは修業談をお口にするのではないのに、それをあえて高言なさるのであるから、留学からお帰りになって中央大学にお勤めの頃の先生の妻まじい勉強ぶりが目に浮かび、ひるがえって、我が身の臍甲斐なさが急に淋しく思われた。しかし僕が腰を浮かし、これから帰ってシャワーを浴びて勉強しますと申し上げると、馬鹿だなあとおっしゃって、今度はほんとうに叱られた。

若い人間を焦慮に駆るだけの安直な修業談をなさる方でないことぐらひは、学生の時分から存じ上げていたはずであった。何度かせがんでその研鑽の有様をうかがううちに、あたかもディプティックの祭壇画のように、そのお話にはかならず対をなす続きがあることを思い知らされた。つまり、先生が三十代の後半から四十代にかけて迎えられた何年かにわたる大学紛争のことで、先生はこの時期、ほとんどすべての時間を費やしてさまざまな問題に対応なされたのである。たとえば、仏文の大学院の学生だった人たちとしばしば夜どおしの議論となり、おそらく全霊を籠めていらしたからと思われるが、その時もはや四十を越した先生が、若い学生の舌鋒に破れて悔し涙を流しましたとおっしゃる。もちろんこのあたりの事情は微妙で、文学部の破れた時間割りしか見ていない人間が、軽々しく口をはさむべきでないことは承知のうえではあるが、本来のお考えと立場や職責との兼ねあいを思いつめられ、心身とともに擦り減らされたのであろう。つまり僕のごときが、酒の席を中座してこれから勉強しますなどと言うのは、思い上りもはなはだしかったのだ。話を一段落させた先生の無然たる沈黙が、したくてもできない時のことを考えてするのが本当の学問だ、という難詰の言葉になって聞こえた。また、なにやら恋の奥義のようではあるが、できない時にもせめて思いはつのらせるのが本当の学問だ、という慰藉の言葉にもなって響いた。

しかもこの話をなさる時の先生は、こちらを嫉妬に駆るほど神妙で、学生であった人たちへの労わりの思いが漂っている。仏文の研究室は学生の管理のもとに置かれていたのだけれども、実に本を大切にしてくれた、一冊もなくなりませんでした、と先生はおっしゃるのであるが、その後、確かにすこしばかり恥ずかしそうになさって、ス

ラトキンからリプリントが出たばかりであったグージュの『ビブリオテック・フランセーズ』だけは心配で家に持って帰りました、とつけ加えられた。復刻本の出版が盛んになったのは60年代の後半のことであり、当然ながら当初はよりぬきの稀観書のみがリプリントの対象となった。なかでもグージュの大部の書誌は、ラ=クロー=デュ=メーヌのそれと並ぶいわば幻の逸品であり、しかも16世紀研究には不可欠の参考書なのである。先生はいったい、何に対して恥じらっていたのだろうか。

駒場で紛争の余波のストライキが長びいたので、僕たちの学年が仏文科に進学したのは、ようやくと6月になってからのことであった。法文一号館四階の窓のない大きな教室には、すでに夏の熱気がこもっていた。ルイズ・ラベの恋愛詩を講読する二宮先生の授業は4月から始められており、お話がちょうど佳境に入ったところだったのであろう、16世紀のフランス語法の解説にも、それまで耳にしたこともなかった辞書や研究書の名前がいきなり飛びかった。もっとも、今になってその時のノートを取り出してみると、必要な説明だけはきわめて手際よく書き添えられているから、先生がいかにか新しい学生の理解力を配慮なさり、しかも講義の流れもとどこおらせぬように心を砕いていらしたかが偲ばれる。

先生は辞書の名前の綴りをひとつひとつ黒板にお書きになった。しかし、後生大事にそれを写し取る学生があまりに生真面目すぎて見えたのかもしれない。あるいは、僕たちがあまりに恋愛詩の勘所をはずして杓子定規にノートを取っていたのかもしれない。初めての授業が終わった時、先生はそうした僕たちの緊張をからかい、また戸惑いをねぎらうかのように、君たちは若いからこのような甘い言葉で綴られた恋に憧れるのだろうか、でも、恋愛は夏なんかには暑苦しいものですよとおっしゃって、あっさり教室から出ていかれた。聞きようによっては、生々しい言葉である。けれども、その生々しさによって僕たちは恋愛詩を読んでいたことに初めて気がつき、そして、ついさっきまでそれに思っていたらなかった自分に愕然とした。僕たちの学年の多くの学生が、あの時、仏文に来たのだという思いを噛みしめたのだ。

僕が大学院に進んだのは1974年であるが、その年の授業のことはこの先も忘れられないだろう。先生はテキストにジョフロワ・トリーの『シャン・フルリー』をお選びになった。これは、パリ大学の教授職をなげうって印刷業に走った初期ユマニストのトリーが、1520年代というきわめて早い時期に、野蛮な民衆語と認められていたフランス語を美しく生まれかわるべく称揚し、あわせてそのフランス語を盛りつける新しい活字のデザインを論じた書物である。ただ、書物史の方面で破格の稀観書ともてはやされたために、かえって文学史の興味の対象からはずされ、近代活字版に復刊されることもなかったし、まともな注釈的研究もおこなわれていなかった。その初版が、前年の1973年にスラトキンから復刻されたのであって、おそらく先生としては、舌なめ

ずりをしながらお取り上げになったのだらうと思われる。

まさに脂身のしたたるテキストであった。先生は初めまず初期ユマニストと印刷術の関係からお説きになり、古刊本の活字の話、そこにあらわれる中世写本以来の省略表記法の話と続けられ、パレオグラフィーについても少し触れたところで、必要な参考書をそのつど指示なすってテキストを学生の発表にゆだねた。すでに先生に食欲を掻きたてられた僕たちには、注釈なしの16世紀の刊本が、あざやかな包丁さばきをせがむ豊富な肉塊のように見えた。あの授業の時には、近代文学を専攻する友人たちも確かに熱に浮かされていたのであって、古代作家の引用とあたりをつけるやビュデ版を繰って出典を探しまくり、固有名詞とみるや総合図書館の薄暗い書庫を漁って調べまくり、僭越なことながら先生の下調べの鼻をあかそうと試みたものである。

『パンタグリユエル』第六章に、ラテン語まじりの奇々怪々なフランス語をあやつるリムーザンの学生が登場する。ラブレールはそこで浅薄な知識をひけらかす愚かしさを嘲弄しているのだが、実は『シャン・フルリー』の中にも当時の学生たちのラテン語を模した語法をたしなめる箇所があり、ラブレールはここからヒントを得たと考証されている。僕が発表を割り当てられたのはそのページであった。例によって先生はあらかじめ参考書を御指示くださり、詳しい注釈のついた協会版のラブレール全集、ユゲの16世紀語彙論、セネアンのラブレール語法論、それから何冊かのアルゴの歴史などを思いつかれるままに、しかしそれでも手心をお加えになりながら掲げられた。

一週間のあいだ、僕はそうした参考書をたよりに一語一語を調べていった。しかし前の晩になって突然ひらめくところがあり、いくつかの単語がドナートゥスの『アルス・グラマティカ』で見覚えた奇妙な文法用語に似通っていることに気がついた。まだ必要な参考書をすべて通読してもいないのに、その夜はドナートゥスと首っぴきで単語の対照に費やし、結局、ドナートゥスの初級文典にかぶれてラテン語をふりまわす徒輩をトリーは諷刺しているのだときめつけて、先生もこれには思いおよぶまいと得意気に学校にでかけた。

僕の発表は、思い込みのせいできさぞ見苦しかったことであろう。先生はいつものように学生の席にまじっておすわりになり、黒板にひとりよがりの例文をつらねる僕の説明を聞いていらしたが、発表が終わった時、よく考えましたとにこやかにおっしゃってから、ノートは閉じられたまま、僕がとくに力説した二、三の単語の解釈について、16世紀の語法に照らしてごごく平易に説明のつく旨を述べられた。それでちょうど時間になったのであったが、他の単語もまた何のけれんもなく解釈されうる。冷静になって広い観点から考えてみれば、トリーがかならずしも『アルス・グラマティカ』を意識しているのではないことは明白ではないか。先生について教室を出ながら、早とちりの仮説にも、我を忘れた思い込みにも冷汗の出る思いであった。先生はその後、研究室にお戻りになってから、よくドナートゥスを思い出したねとねぎらって下さり、ラブレールはプリスキアヌスは評価していたようだが、いたるところでドナートゥスをこ

きおろしていますとお話を始められた。ああ、しかし、この時僕は自分がリムーザンの学生を演じていることに、ほんとうに気がついていたのだろうか。

この学年では、ほかに秋口と、それから一月になってからの都合三度、僕は先生の授業で発表している。一度など、トリーがヤコブス・デ・ケソーリスの『教訓的チェス論』の名前を引用しているのをさいわい、かんじんの『シャン・フルリー』のテキストなどそっちのけでこの書物について調べ、14世紀にいかにかジャン・ド・ヴィニエによるフランス語のその翻訳が成立したかについて、時間のすべてを使ってまくしたててしまった。先生はさすがに鼻白まれてか、発表が終わったあとで、いやー、久しぶりに学問をした気になりましたとだけ評されたのであるが、実はこの時もまだ僕はよく気がついていない。また、トリーがルキアノスの『ガリアのヘラクレス』のエラスムスによるラテン語訳と彼自身の手になるフランス語訳とを対照して掲げた箇所が当たった時には、先生からお借りした16世紀フランスにおけるヘラクレス神話についての参考書に夢中になってしまい、美しい国語の可能性を問うたトリーの意図には無頓着な発表になってしまった。

誰でも大学院に進学したばかりの頃なら覚えのあることだと思われるが、眼前に文献の沃野がひろがるのを目にすれば、夢見のような心地でなかば本能的に探求に分け入ることであろうし、また、そうするのが当然なのでもあって、先生もさまざまな書目を指示なさりながら、むしろ僕たちの本能をけしかけられた。しかも、その探求で何を見つけ、それをどのように持ち帰るか、それぞれの資質なりセンスなりのからむきわめて微妙な問題である。あるいはそこに、それぞれの学問の若い芽がきざすのだと言うこともできる。先生はこれについても僕たち学生の労をねぎらい、どんな発見であれなんらかの言葉をかけて下さった。ただし、先生が一つだけお譲りにならなかったように思われることがあって、それは、テキストの正確な読解という出発点の問題なのである。

テキストが何を語っているのかというレベルの話ではけっしてない。そうではなくて、テキストがその内部から示唆するあらゆるレフェランスをあたうかぎり調べつくすのかかわら、テキストを歴史的な文脈の中に据えなおし、博搜の知識のどこまでがそのテキストの受け入れる許容の範囲であり、どこから先がアナクロニズムや論理矛盾などの理由で許容されない領域であるかを見極める。そして、許容されたレフェランスのみを可能なかぎり伸びやかに働かせてテキストを読み解き、それ以外はどれほど苦心して得られた興味深い知識でも、解釈にむかって触手を伸ばすことをいっさい許さない。こうした、熱狂と抑制という、相せめぎあう二つの精神の作業を同時におこなう読解のことなのである。テキストはこの時、躓きの石となる。

御著書をいただく時にサインをお願いすると、先生は署名のかたわらに端正な文字で vieux glosateur(年老いた訓詁学者)とお書きになることがある。また、先生は黒板の前の教官の席を発表者に与えられ、御自分はいつも学生の席におすわりになっていた

から、隣になった時にそれとなく先生の丹念な細字でうずまったノートを覗きこんだこともある。先生こそは御自身が稀代の「調べ魔」なのであり、おそらくはそのために、文献調査や研究が必然的に帯びるあの熱に浮かされた興奮に幾度となく駆られ、思わせぶりな16世紀語法のテキストが示す放恣な解釈への誘惑にたびたび身をまかせたはずである。しかし先生は、教室で、学問を志したばかりの僕たちに対して、こうした熱狂のはてにあらわれる偶然の発見と巧妙な理論を口にするのを控えてなさらなかった。いや、むしろ、僕たちの解釈を正される時でも、また僕たちの発表を評される時でも、いつでも出発点のテキストを軸として課しておられたのであろう、その知識やノートの中から篩にすくい取られた部分だけをもちいて、バランスのとれた読解を示される。そして残余の部分は、気がむかれると授業のあとの雑談やお酒の入った席で楽しげにお話になるのだが、ここにおいて僕たちはその対比に愕然とし、初めて先生のストイックな作業の意味を悟るのである。

つまり『教訓的チェス論』の例に即していえば、インクナブラの時代やルネサンス期についても翻訳史を調べ上げ、あわせてブリュネの書誌やB・Nのカatalogぐらゐは参看してトリイの読んだエディションを特定し、そのエディションの訳文の出来と翻訳理念の流れからトリイの反応を推しはかるのでないかぎり、いかに興味深いものとはいえジャン・ド・ヴィニエの業績についての知識は、『ジャン・フルリー』の講読につながりを有するその極限のところ、応分の時間におさめるべきだったのだ。テキストも恋と同じで熱狂に駆りたると同時に抑制を求めるものであるということ、そしてさらに、絶妙の地点で抑制するには気の遠くなるような知識の裏打ちを要するらしいことを、僕がまがりなりにも知るの、あと二、三年、こうして先生の授業を聞かせていただいた後のことであった。

先生がテキストに対して示された態度は、見方を転ずれば、これも先生が何年かにわたって学部で授業で講じられた、狂信の時代における寛容論の役割に通じる。凄惨な光景や愚劣な行為をまのあたりにし、身を挺して人びとの狂気を醒ますのは、確かに勇気を要することであろう。しかし、二宮先生は、終始なごやかな空気のためよう午後の静かな教室の中で、寛容論をイデーの側面からだけでなく、読解の方法としても僕たちにお伝えになったのであって、相手は身に寸鉄をおびることのないテキストであるといえ、ある意味でいえば、これもまた同じように剣呑きままりない営みであるに違いない。どれほどの学問のはてに成しとげられうることであるのか、先生のたどっていらした目くらむばかりの長い道程の一端に、僕は今ようやく思っていた。

1989年1月の末、先生は本郷での最後の授業をなさった。「ルネサンスの女性観」と題された学部の講義で、すでに先生はロンサルに如実にみられるように美女の基準が中世とは変化したと説かれた後、ラブレーの女性描写と当時の医学との関連、カルヴァンの結婚論における女性観など、さまざまな問題をテキストに即して取り上げて、

16世紀において女性がいかに劣った節操のない存在として考えられていたかを論じられたのだという。この日は、そうした講義の締め括りとして、ドイツのミスティックな人文主義者アグリッパ・フォン・ネットスハイムの「女性の高貴と卓越についてのデクラマティオー」を、16世紀後半のフランス語訳でお配りになって話を始められた。

不思議な内容であった。創世記からの引用が壺にはまって織りこまれ、アダムよりイヴのほうがすぐれていると説いている。したがって、その出自からして女性のほうが偉いのであるとたくみに論理を導く箇所を、先生は淡々と読解されてゆく。最後をどんでんがえして女性賛美のうちに終えられるつもりなのだと、誰もが考えるところなのだが、実はこうしたテキストの選択と配列に、先生の識見の篩と、それから一流の機智が働いていたのである。これがデクラマティオー（練習弁論）と銘打たれているからには、雄弁に説かれていれば説かれているだけ、著者の真意は疑わしいものに化してしまうのではないか。テキストのあざやかな変貌に、僕たちは息をのんだ。

この日、研究室のパーティーも一段落しようという時、二宮先生は、声の調子をいくぶんか強められて、君たちは若いのであるからいろいろと勉強してお読みなさい、僕はこれからも本能で読むとおっしゃった。しかし、先生は酒に酔っていらしたのではない。むしろ青ざめて見えたほどであった。先生の「本能で読む」というのは、僕たちの闇雲の本能とはまったく反対に、16世紀のテキストのもっとも言の葉茂きあたりを、けたはずれのコーパスを自在に操りながら、足ども軽やかに行きつ戻りつすることなのだ。僕たちはその場に立ちすくまざるをえなかった。

このたび仏文科の大学院生が主催する『仏語仏文学研究』の誌上を借りることができて、先生の御専門にゆかりの深い中世・16世紀を専攻する僕たち教え子の論文を集めたというのも、かつて先生の授業を受けていた時のように、また僕たちの発表を先生から「本能で」評していただきたいと、ひたすらに願うからなのである。

(1990・8・10)